

ダルビッシュ有が124球目を投じたその瞬間、札幌ドームの満員の観客——4万2126人(45人のチアリーダーは含まず——そう、なんと45人もチアリーダーがいるのである)は、まさに雷のような凄まじい音をドーム内に響かせていた。

そして、渾身の一球が相手打者のバットをへし折ると、その折れたバットがマウンド方向に飛んだが、ダルビッシュはやや遅れて転がって来たボールを落ち着いて処理すると、一塁に投げてゲームセット。

すると、客席の発する音はいっそう大きくなってドームに木霊し、チームの開幕戦勝利を祝う。1対0。ダルビッシュ自身は、4安打、10奪三振をマークして、勝利の原動力となった。

チームメートとハイタッチを交わしてからダグアウトに戻った日本球界の比類なきエースは、日本ハムのマスコットとも手を合わせる——。

いや、ちょっと待て。もとい。

話を進める前に、ダルビッシュは“日本ハム・ファイターズ”の投手であって、“日本・ハムファイターズ”ではないことを明確にする必要がある。説明がなければ、アメリカ人は勘違いしてしまだろう。

去年まで5年間に渡って日本ハムで指揮を執ったロイヤルズのトレイ・ヒルマン監督も、苦笑しながら言った。「『あなたは日本で、豚と戦っていたのですか』と、みんなは思うだろうね。豚がグラウンドにいて、選手がバットを持っている……」

豚の格好をした侍が刀をグラウンドで振り回す、または、漫画の世界の悪魔が、肉の貯蔵庫でハムにパンチを浴びせる——映画「ロッキー」には、主人公のロッキー・バルボアが、ハムの塊を叩いてトレーニングをするシーンが出てくるが、それはそれで、確かに楽しい余興のように聞こえる。

ただ、話を進める前にクリアしておかなければならない。彼らは、「日本ハム・ファイターズ(日本ハムの戦士たち)」であって、決して「日本・ハムファイターズ(日本のハムと戦う戦士たち)」ではない。

さて、我々は普段から、アメリカのスポーツが、商業主義に毒されていると感じている。球場の命名権を企業に売ることなどその代表的な例で(ところで、毎年のように名前が変わる今年のサンフランシスコの球場名は、なんだっけ?)、カレッジフットボールのボウルゲームの中には、チキンサンドウィッチの有名なチェーン店、「チック・フィルーA」を冠にした「チック・フィルーA ボウル」なんていうものもあるし、ミネソタでは、「スナッパー」という芝刈り機の会社になんだいニングもある。

しかし、日本野球界のそれと比べれば、目くらまを立てるほどのものではないようだ。

通常、アメリカのプロチームは、そのフランチャイズがある都市名がチーム名の一部となるが、日本の場合は、そのチームを所有している企業名が、チーム名に含まれる。

日本ハム(ハムなどの食品業)に加え、西武ライオンズ(百貨店、鉄道会社などを経営)、千葉ロッテマリーンズ(菓子など)もそうで、東北楽天イーグルスも、球場名が「クリネックス・スタジアム」であるのに、「楽天」はインターネットを中心にビジネスを展開する会社なのである。

彼らにしてみれば、勝つことはもちろんだが、同時に、いやそれ以上にチームを通して会社の宣伝を行うことが優先されているようでもある。

悲しいかな、日本はアメリカの遙か先を行っており、となれば今後、アメリカにも同じような考えが広まるかもしれない。

「ウォルマート・ロイヤルズ」、「ブラックウォーターUSA・レンジャーズ」、「ハリバートン・ヤンキース」——そんなチームが誕生すれば、それは少なからず日本の影響だろう。

そんなビジネス的側面から考えれば、ダルビッシュが5年後にFA(フリーエージェント)でメジャーに移籍するか、ポストティングでFA前にメジャーに挑戦するか——日本ハムの立場に立てば、戦力よりも、経営的判断が優先されてもおかしくない。

もちろん、日本を離れてメジャーに挑戦するかどうかは、かつてシアトル・シーホークスのトレーニングキャンプが行われていた施設のカフェテリアで働いていたイラン人の息子であるダルビッシュ本人の決断によるが、多くの日本人スター選手(イチロー、松井秀喜、松坂大輔、福留孝介ら)が去り、スターとはいえなかった選手らがそれに続く現状を考えれば、彼が、より高い給料と、世界の最高峰であるリーグでプレーしたいと考えることは、むしろ自然なことに見える。

ただ、そのときに本来議論されるべきことは、ダルビッシュがメジャーに行くかどうか、いつ行くのか——ということではなく、この流れが、日本の野球界にどんな影響を与えるのか、ということなのかもしれない。

その答えは難しいが、千葉ロッテのボビー・バレンタイン監督は、いつものように、ユニークな考え方を持っていた。「今の流れというのは、アマゾンに行って、森林を切り開く——しかし、新しい木を植えずに放置するようなもの。そして、生態系という視点で考えるなら、今の真ん中のレベルの選手たちが消える状況こそ大きな問題で、その結果、ファンを失うだけでなく、日本のタレントレベルを下げることにもなる」

(ところで、念のためここで触れておくが、日本ハムのマスコットは、豚ではない。もちろん? モヒカン狩りの熊である)

NAKED GAME THE PITCHER

アメリカのレトロパークブームは、日本にまで及んではない。カムデン・ヤーズもなく、日本のプロ野球チームの半分が(大阪ドームを含めた場合)、ドーム球場を本拠地とする。

日本ハムが本拠地とする札幌ドームは、日本と韓国で共催された2002年のサッカー・ワールドカップのために作られたものだろう。そのために、ファールグラウンドはすっぽりと両ダコタ州を覆い、ワイオミング州の一部さえ、その中に入ってしまふほど。また、およそ5メートル50センチのフェンスによって、理想的な投手有利の球場となっている。

試合前——、ダルビッシュが人工芝に足を踏み入れたそのとき瞬間から、日本人記者の半分が、彼のあとに続いた。

彼らは何を聞いているのだろうか？

黒星のない、彼の完璧な勝敗のことだろうか？（5月7日に今季初黒星）

1点台の防御率のことか？

彼がヌードになった雑誌について聞いているのかもしれない。

いや、女優との結婚式のことだろうか？

3月に生まれた子供のこともかもしれない。

ひょっとした、アメリカで投げたいか？ なんて聞かれているのか？

彼の夢の一つである、イランの野球界を盛り上げることに聞かれている可能性もあるだろう。

ただその推測は、どうやらあまり意味をなさない。ダルビッシュはほとんど反応せず、真っ直ぐ外野を目指して歩いていく。この限りにおいて、誤訳などありえない。

その光景からは、ふとバリー・ボンズの在りし日を思い出した。

しかし、ボンズとは違ってダルビッシュは、イメージの問題を抱えているわけではない。

むしろ、その人気は飛び抜けており、特に10代の女の子らは、うっとりとして彼を見つめている。彼の端正な顔立ち、広告や雑誌の表紙にも多く起用され（ある雑誌には、ヌード写真さえ、掲載されたことがある）、その人気は、札幌がある北海道だけでなく、日本全国に広がりを見せている。

それも、当然だろう。マウンド上での特別な才能に加え、彼は人口統計学者の理想と言われる？ 196センチの身長と細身のボディを併せ持ち、掘りの深いエキゾチックな顔立ち、ベースボールカードというより、カルバン・クラインの広告で見かけそうである。

その独特の顔の特徴は、アメリカで出会ったというイラン人の父ファルサさんと母郁代さんの血を受け継いだものだ。

ラストネームは、ダルビッシュセファット。ダルビッシュの祖父、つまりファルサさんの父が、旅行代理店で働いており、小さなころからファルサさんに、広く世界を見るよう促した。

結果としてアメリカの高校を卒業したファルサさんは、フロリダの大学に進学する。そこではサッカー選手として活躍していたが、1979年にイラン人の学生らが、テヘランにあるアメリカ大使館を乗っ取り、52人もの大使館員を人質にする事件が起きると、状況が一転。

アメリカの有名なテレビアンカー、テッド・コッペルの誕生は同時に、アメリカで学ぶ若きイラン人を苦境に陥れた。

「私のコーチは、私を2年間ベンチに置いた」と、その頃のことを、ファルサさんが振り返る。

ただ、その言葉から、苦しみは伺えない。ファルサさんは笑みさえ浮かべた。

「それが、私を精神的に強くしてくれたからだ。以来、私は決して諦めなくなった。このことは一度、有にも話したことがある。なぜならスポーツの世界には、自分のことを嫌う人もいるのだから」

